添致指圖候哉。拙者見請候樣子、左樣之躰も無之候。此御縮方は如何仕事に候哉。

一、右兩人、一人は廿七八歳に見え候。一人は十三四之せがれに候。廿七八歳之者に、殿樣追付御歸に而嬉敷候哉と申候へば、左樣に御座候。今年は米高く、何もかも賣喰申候。十年に一度も半分も被下候へば能候へ共、一合から一合迄御取上候故に、何とも成不申と申捨、水飲候由に而下の方に走り行候に付、申度儘之儀沙汰之限としかり候而、十三四之せがれに、かの者は名を何と申ぞと尋候へば、あれは脇之者に候故名不存と申に付、前方同在所之者之由申候所難心得と申内、下手より又一人罷越、かのせがれに何に候哉と申候へば、仁右衞門の事に候と申に付、されば こそ同所之者に而、名もよく存候所僞を申聞候。幼少者に而も左樣に心躰惡敷と申、さん〳〵叱り、拙者は追付立去候所、跡より參候者笑止に存躰に而、暫拙者跡に付參候に付、家來に、扨々沙汰之限りに候。改作入用七十一石被下儀は何と心得候哉。かの幼少者迄もあのごとく根性まがり候と申、拙者は脇道に立別候。右仁右衞門口上、承屆候通聊聞違等無之候。自然左樣に不申と申候共、聞上申間敷候。か樣に申度儘之儀、惣而侍中見懸候へば口にまかせ申躰、每々承及候。右仁右衞門口上、一合から一合迄御取上抔と申儀、他國者に爲聞候はゞ如何之御仕置と可存候。右躰之者、其通承捨に致置候而は、彌申度儘可申候間、同役申談、仁右衞門儀縮も可申付者に候得共、此度は御着城之御時節にも候間、先其分と存候。其方より急度申付、惣而百姓共か樣之不法無之樣に、より〳〵を以村役人共に申聞、急度相しめし可申候。以上。

八　月

右蔭切之樣子尋候所、蔭切と申趣には無之、前々より茶臼山續之儀は御郡奉行支配に而、松木其外之木共に茂り不申樣に折々伐取、切手間に三ケ村に被下候。蔭切に候へば改作所にも達候へ共、是は御郡奉行切に御座候。扨は大衆免村之者共は就中風俗惡敷、方々に而右躰之儀申由兼而承候得共、慥成證據無之儀は難申付候所、今度之儀は幸御縮方之第一に御座候間、十日・廿日も手鎖打、惣樣之みせしめ旁、急度可申付旨長次郎申候。

一、同十六日長次郎罷越申聞候。昨十五日幸步入之儀申渡候節、此一卷遂吟味候所、大衆目村與四右衞門下人に付、則誤書付申付、手鎖付、與四右衞門に預け申候。尤先達而之口上に聊相違無御座候。幼少者も仁右衞門傍輩に而、石松と申者に候。是又誤書付取之、是は幼少者に付手鎖は付不申候。其外一村之百姓急度申渡、人々判形爲致申由に而、口書共致持參候に付、最初之趣陳じ不申一段に候。宜程に手鎖ゆるし候樣に申聞候。跡より參候者、是も同村七兵衞と申者之下人之由に候事。

一五三　假高之事

草高　　河北郡

一、百四十二石三升五合　　俱利伽羅村

定免四つ七步

七拾四石二斗三升三合　　定納口米

内

一、百三拾一石七斗八升八合　　長樂寺入

免四つ二步五厘

六拾二石二斗八升三合

殘高

拾石二斗四升七合　　免四つ七步

五石三斗五升五合　　御藏入

上免四步五厘

六石五斗九升五合　　御藏入

一五四　諸方上納月上り覺

延享三年寅之年分

一、百二拾五貫七百目餘　　正月分

一、百七拾一貫三百目餘　　二月分

一、五百二拾四貫七百目餘　　三月分

内三百貫目御かり銀

一、百五拾三貫八百目餘　　四月分

一、百八拾八貫二百目餘　　五月分

一、百三拾五貫六百目餘　　六月分

一、二百四拾五貫三百目餘　　七月分